



沖

俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

湖 霊

能村 研三

素材か表現か

蕎麦 咲いて 旅先で 寄る 骨董屋

よき 丈と 祖霊 迎への 盆の 箸

白神 は 撫の 輪廻 や 秋立てり

お岩木 に 色づく を 待つ 林檎かな

七月にオープンした市川市文学ミュージアムの常設展のコーナーで登四郎愛用の品を展示したいとの依頼があったので、普段使っていた万年筆と俳句の手帖を貸すことにした。俳句手帖といつても、おそらくは丸善などの文具店で買ったと思われる手帖で、最初の頁には使用した年数が書かれていた。「昭和六十一年」とあるから、母が亡くなって蛇笏賞を受賞した直後のあたりで、一切放下の境地の中にいて、深遠にますます艶麗な句を作った時代であろう。当時の「沖」に登四郎は次のような文章を書いている。

「私は旅に行く時も、吟行の時も殆ど句帖のようなものを持っていかない。見たものや風景を頭の中に刻みつけて帰り、一三日してから思い出して作る。だから見た瞬間句になつた例は少ない。忘れたものはそのまま、印象の深かつたものだけが残る。見た景をすぐに文字に写すということが何故か不安で、一度心の底で沈めて濾過されたものでないと納得できない。見た瞬間すぐ俳句に

十和田湖は緑の壺中秋澄めり
一舟が湖霊を覚ます爽気かな
靈巖に触るる素足は霧の中
襖ぎとも湯殿詣での素足かな
樵林梳かし山澄む奥参り
覗き見るつるにんじんは万華鏡

※一部「WEP俳句通信」掲載句

なるという写生派の俳人とは違うようだ。若い時には素材というものをかなり重要に考えたが、七十を過ぎると俳句は表現に心を砕くことが大切なことが分かった。」

この文章からも、俳句手帖には現場で俳句の素材を取材したものでなく、あくまでも机の上で俳句の表現に思い悩み、推敲の過程が記されていることがわかる。

ちようどこの時期は、俳句を作る楽しさに溢れていた時代で、総合誌には年齢の数と同じ、七十七句、八十句という多作を試みた頃。一つの作品群を発表する前に、一句一句の流れや配列、句の中の季語を改めて確認するなど、発想から一句の完成までを手帖の上でもがき苦しんだ痕跡がありありと窺えた。

私に時間の余裕が出来た時には、この手帖の痕跡を辿りながら、句集に発表した句と照合し、登四郎が何を詠みたかったのかを考察してみたいと思う。

能村 研三

蒼茫集



銀細工

辻美奈子

退屈でならぬ 苦瓜爆発す
炎天を行く同じ荷を負ふごとく
小祥や蜻蛉の羽の銀細工
伸びしろを残して過ぎぬ夏休
思春期やちよと来て花火二三本
寝巻とふ言葉よろしきそぞろ寒

稲架日和

林昭太郎

捕虫網新幹線の中を行く
新涼や針のくぐれる衣の波
蛇といふ涼しきからだ泳ぐなり
星今宵チエロとチエリスト凭れ合ひ
濤音の聞こえて尽きぬ大花野
下総を一日ぬくめて稲架日和

風の形

安居正浩

老人の日の老人でありにけり
初萩の織りなす風の形かな
産土の闇を思へり 稲光
冬瓜を傍らに置き落ち着きぬ
食卓に薄日届きぬ 厄日前
初秋をまさぐるやうに嬰の足

五加垣

成宮紀代子

空気入れ押し戻しぐる秋暑かな
風船葛一吹き息溜めてをり
葡萄棚の高さ家族の背の高さ
穂芒の紅や寒河江の人偲ぶ
梵天を白布の被ふ狭霧かな
小鳥来る海坂藩の五加垣

白 炎 遠藤真砂明

砂丘白炎大灘の鳴りやまず
朝の日に濡れて見に入む潮仏
雄ごころで締める野分の錨綱
秋気凜々北斎の波がしら
秋声か海難の碑の沖鳴りか
沖がかりなるぞ台風来るなら来い

ぼつりぼつり 千田百里

湯殿山・月山
恙なき厄日のはだし詣かな
露の身の足裏拭ひぬ詣あと
月読の山にこころを放つ秋
野分して猫の目螺鈿びかりかな
長き夜や朱をもて語句を裏返し
夜のぶだう夫の独語のぼつりぼつり

月 山 望月晴美

月山の秋風どこかレクイエム
月山の霧が霧押す流れかな

灯を消して志津の秋風通しけり
湯野浜のすくとんと釣瓶落しかな
戸口まで霧の深さの奈良井宿
蓮池の寂光を背に夫ねむる
ことふれ 田所節子

海に触れ秋の夕日の重くなる
今日処暑のことふれのごと一雨過ぐ
冷凍庫の魚出しおく厄日かな
太陽を雲赤く透き秋暑し
竜巻やいま淵に竜潜りたる
その日のままでふ涼風のカレンダー

仕立て良き 甲州千草

仕立て良き大きな一樹蟬時雨
竜胆とリフトの間の山気かな
霧奔る湯殿詣の足裏熱
夕立が来るか頤こそばゆし
月太るビル屋上を台座とし
高灯しの味醂工場虫しぐれ

甘言 荒井千佐代

甘言と薔薇の百本受け取りぬ
身のうちに深淵のある秋真昼
献花はや午後には萎れ原爆忌
原爆忌過ぐや川底渴ききり
通夜の灯をひとつも消さず秋あかつき
赤秀樹の高きに洞や小鳥来る

安堵 宮内とし子

この色に香のなき安堵曼珠沙華
再生の湯とや月山霧しぐれ
早朝参り岩打つ水音露けしや
いわし雲遠き踏切鳴りにけり
木犀や吉報の朝明け放つ
行く秋の百葉箱の白さかな

お湯渡り 吉田政江

月山の汚れ雪溪かくす霧
八朔や幣束きはだつ湯殿山
御神体の他言の禁や濃りんだう
秋暁やそろりと朱土へお湯渡り
鳶茸の濡れ羽色なる鰻づくり
晩夏光干されて縮むボタン孔

縦一列 久染康子

盆帰省客間となりし母の部屋
鬼燈の縦一列の系図かな
曼珠沙華咲かせて茎は貧血に
鞍馬路の靄ささくれて川床仕舞
秋風や門太きカヌー小屋
植物に羽化ありとせば薄の穂

月雫 森岡正作

ウオツカ燃ゆ最北端の青銀河
祖霊にも宴あるらし稲光
酔ひ覚めの水月山の月雫
胸張れと秋の声とも父かとも
烏瓜曳く音信の欲しき時
農の焚く煙ひとすぢ秋の暮

川霧 鈴木良戈

川霧や砂利船いまだ綱解かず
西方に雲濃く澱む震災忌
廃船のぶつかりあへり葛嵐
さらさらと学校田の落し水
敬老日阿呆のごとくをりにけり

水 柱 大畑善昭

ホテルあり藍濃き秋の沼があり
力蒟蒻旨しぐるりには尾花
霧を行く声どつこいしよどつこいしよ
目を洗ふ竜胆リフト終点まで
湖面より伸び秋天へ水柱
湯じめりの巨岩の神を拝み秋

風立ちぬ 上谷昌憲

デザートに葛切が出て風立ちぬ
向き向きに風船葛旅恋へり
ナイターのとどめの犠打の転々々
木造の駅舎つましく小鳥来る
睦むともなくかたまれる曼珠沙華
天気晴朗千代田区千代田曼珠沙華

日々抄 河口仁志

万歩計すこし休ませかき氷
飛び出でて崩れは見せぬ蟬の穴
キャンプの子大きくひろげ天体図
魚眠る海の底まで熱帯夜
水澄むや蓴菜池の先師句碑

初 風 瀨上千津

総身に秋の初風師の句誦す
墓碑守の殿様飛蝗に迎へらる
踏み込めばたちまち迷路樹海茸
寂しさの雑言と聴く轡虫
落穂ひろひのやうな晩年いとしめり
歩き炊き話すりハビリ秋落暉

ノック 北川英子

山ホテル色なき風がノックせり
富士の裾めぐりていよよ水の秋
白糸の一糸づつ秋寂びて瀧
真つ暗な樹海へ流れ入る銀河
あと一人遅参の一人待つ新酒
睡眠薬切れし夜流星また流星

料 紙 湯橋喜美

新涼の先端に干す客布団
墨の香のほのかな料紙延べ白露
秋思ふと背筋正しに寄る柱
渴水に豪雨竜巻草は実
朝顔の絞りの種はどれだつけ
こほろぎや身の芯通る真夜の水

潮鳴集



能登キリコ

阿部眞佐朗

祭闌け地軸を揺するキリコかな
塗師二代磨きを入れる夜業の灯
夜濯の水かがやけり能登和倉
門火焚く能登福浦の船溜
ドラマーは千手観音星月夜

知らぬ

小菅暢子

宅配便秋暑の箱を運びぬる
ほんたうの歳は知らざり生身魂
人の手の温みに違ひ鱗雲
教会は飛び立つ形秋高し
知らぬ地のとほき十分石露日和

きゆきゆつと

栗原公子

窓ふきのゴンドラ秋の空みがく
秋の空ふけばきゆきゆつと鳴りさうな
秋麗の空ちりばめて樺大樹
秋の風トリコロールを掲ぐ店
振り向けばだあれもゐない大花野

がちやん

菊地光子

流木の肌の丸さよ鱗雲
秋風をがちやんと掴む連結音
闇たたへ風をたたへて月齡子
朝練の背を追ひたて蟬時雨
新涼や素ガラスに透く風の音

沖作品



能村研三選

遠泳子波の鼓動を滴らせ

千葉 石崎 和夫

大夕焼ムンクの空の朱を流し
まつろはぬ民の碑蘇鉄咲く

ブルーゲンビア咲くや歡喜の神の像
鼯鼠なつきびの蒼き梢飛ぶ良夜かな

東京 五十嵐章子

色鳥や帰りはいつもハグをして
常備薬とふ赤きひとつぶ秋めきし
いなびかり握る手つよく返さるる

葡萄柵出て安曇野の空青し
カンナ咲く母にもありし熱き夢

山形 佐藤 淑子

夏豪雨月山どつしり抱き込む
姥百合のそつばを向けるはにかみ屋
折鶴にみ魂を乗せて原爆忌
天界が切りなく怒る夏濁流
鉄砲ゆり白の数だけ昏れ残る

十間橋に佇てば八方風の死す
いぢめの記事続き案山子の顔がない

東京 関根 瑤華

武蔵野は風巻くとこころ葛の花
鶺鴒高音ななめに裂けるセロテープ

実山椒噛み口下手は生まれつき
とんぼうの動体視力全方位

千葉 峰崎 成規

夜の蟬永久に眠るを恐れしか
蛸やかなかなかなと世を穿つ
ボールペンしばしノックの秋思かな

限りの日ひたすら手繰る秋の蟬
天地の育む梨の艶々と

市川市 板橋 昭子

梅干すやいにしへ人の知恵学び
蟻地獄二つ三つに修羅のあと
百日紅おのれの力絞り出し
浜木綿や意見一つにまとまらず

沖作品 15句選評

*
能材研

遠泳子波の鼓動を滴らせ

石崎 和夫

石崎さんがおられる館山は館山湾に面しているが、この館山湾は鏡のように波静かなことから別名「鏡ヶ浦」と呼ばれている。毎年この湾を横断する遠泳大会が開かれているが、約四キロメートルの距離を泳ぎきるそうで、こんな距離は泳げない筆者には気が遠くなるが、大変な体力を要するのだろう。完泳した若者はまだその興奮が冷め切らないようで、心臓の鼓動が鳴り止まない。波をうまく乗り切ってきたので波の鼓動が体に染み付いてしまったのだろうか。泳ぎきった遠泳子の達成感と感動が読者にまで伝わってくる。

いなびかり握る手つよく返さるる

五十嵐 章子

最近日本でも挨拶といえば握手が一般的になってきた。人が出会った時や別れ際に、お互いの手を軽く握りあう握手、片手をそえての握手など、握手をして皮膚の感触があると、相手に暖かさや信頼感が伝わる。しかしこの句の場合、背景となるいなびかりからして、単なる握手のシーンとは思えない。和思相

愛の男女が会う場面と思うのも自然かも知れない。いなびかりがした瞬間であればさらに劇的で、握る手の圧力や時間によって、相手への感情が表わされる。

鉄砲ゆり白の数だけ昏れ残る

佐藤 淑子

鉄砲ゆりは、沖繩など南の国に成育するものだそうだが、今は全国各地で栽培されているようだ。日本では仏花としてのイメージが強く、白色の清潔感と優雅さが漂う。さらには香りの良さも魅力の一つである。夕方になってもその白さは際立ち、香りを放つ芳香性のある花である。一つ一つの花が暮れ際に存在感を示してくれる。

鶉高音なめに裂けるセロテープ

関根 瑤華

よく日常で使う文房具が俳句の素材として詠まれることがあるが、たまたま関根さんの句と峰崎さんの句の二句が並んだ。関根さんはセロテープの句で、だれもが一度は経験したことがあると思うが、使っているうちにセロテープが斜めに切れてしまい、はがす先頭が見つからなくなってしまう。粗悪な品というより、タイミングが悪く焦って仕事をした時などにおこる。その失敗をやや揶揄するように鶉の高鳴きがつづいた。

ボールペンしばしノックの秋思かな

峰崎 成規

峰崎さんの文房具はボールペン。ノック式のボールペンを使っている人は無意識のうちにカチカチさせる。これはある種のストレス発散法なのかも知れない。しかし、この句の場合には、連続してカチカチさせているのではない。時折何かを考えるのか、そのカチカチも止まることがある。何か物思いにふけっている時なのかも知れない。(以下略)